

相対自動詞による結果・状態の表現

—— 日本語学習者の習得状況 ——

小林 典子

1. はじめに

寺村 (1976) に、次のような話が紹介されている。「このあたりもずいぶん変わりましたねえ」と言ったところ、それに対して、日本語の上手なアメリカ人の女性が「ええ、ああいうマンションが最近急にたくさん建てられましたからねえ」と言った、というのである。そして「建てられました」という表現は私にはちょっと妙に聞こえた。文法的にはまちがっているわけではない。しかし、日本人ならふつうは「建ちました」というところだろう。」と述べている。

日本語 (外国語としての) 学習者の日本語らしくない不適切なヴォイス^(#1)の選択, 特にこの例のような自動詞による状態表現は, 上級レベルになっても習得の非常に困難な問題点である。自動詞で「あいた」「消えた」と言うべきところを、「あけられた」「消された」「消せた」と言うのを聞くと、間違いではないが、何か鬱陶しい印象を受け、変な日本語だと感じてしまう。また、初級の学習者の場合は対のある自・他動詞を学習しても、構文的に正しく使い分けることができない。例えば、「ドアをあいた」「電気が消している」のように格助詞と動詞の一致がない文を作る間違いをする。また、活用も不正確で、形態的にも混乱した文を発話する。

このように、行為の結果の状態を自動詞によって表現することは難しいようである。そこで、対のある自・他動詞の習得状況を調べ、日本語指導の指針を得たいと考えた。

2. 相対自・他動詞の習得の難しさ

2.1 相対自・他動詞

「あく」「あける」のような自動詞と他動詞とが対応していると認定する条

件として、西尾（1982）は「同一事態について自動詞による表現と他動詞による表現が成り立ち、「ヲ+他動詞」「ガ+自動詞」という格助詞の対応がみられ、ガとヲの前には同一の名詞が呼応する、という構文論的な性質をとる」としている。また、寺村（1982）は、「形態的な対立の相手のあるもの、というのは共時的に見て、ある共通の語根（Root）から自動詞、他動詞が派生したと見られるもの」として、以下のような例をあげている。

kowa-	-re-	(ru)	ak-	-	(u)
	-s-	(u)		-e-	(ru)

そして、このような自・他動詞のことをそれぞれ「相対自動詞」「相対他動詞」と呼び、形態的に対応する相手のない「絶対自動詞」「絶対他動詞」、及び自他両用に使われる「ひらく」「とじる」のような「両用動詞」と区別している。本稿はこの西尾、寺村の定義に従い、寺村の用語に従う。^(註2)

寺村（1982）で、特に日本語学習者の習得の問題に関係があると思われるものは、「日本語では相対的な自動詞、他動詞が非常に多く、両用動詞は非常に少ない。英語、中国語はその逆である。」という指摘である。学習者の母語では両用動詞であるものを、日本語では区別して使用しなければならないというのは、大変なことであろう。加えて、同じ状況を、自動詞でも、他動詞でも表現でき、しかも、コンテキストによって、いずれか一方が不適切となるわけである。困難さが想像できよう。また、早津（1985）に指摘されているように、「より基本的な動詞ほど自他対応をなすものが多い」。従って、学習者は初級の早い段階で、「窓を開けてください」「デパートは何時に開きますか」などに接することになり、混乱が避けられないのである。

2.2 初級での導入

自・他動詞を考える場合、動詞の持つ他動性と意志性の問題が関係してくる。これらは日本語文法のあらゆる側面に関係してくる重要事項である。筆者もその制作に深く関わった初級日本語教科書『Situational Functional Japanese』（筑波ランゲージグループ1992）（以下SFJ）では、この教科書の文法シラバスの大きな柱として「スル」「ナル」の対立をたて、これをスパイラルに取り上げながら習得させるように設計した。「スル」「ナル」は、それぞれ他動詞、自動詞と重なる場合が多いが、SFJでは意志的か、そうでないかの対立を示

他動詞 [+ヲ]

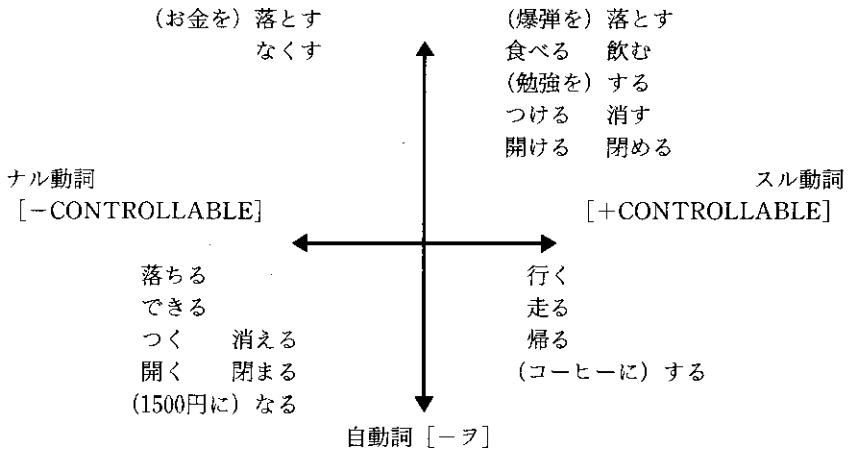


図1 意志性・他動性による動詞の分類

表1 意志性・他動性のSFJでの扱い

3課	～ニスル	～ニナル (コーヒーにする 1500円になる)
8課	自動詞+テイル	「開く/開ける」(開いている, 開けないください)
9課	形容詞+スル/ナル	(暖かくする/なる 静かにする/なる)
11課	相対自他動詞	(「車が止まっていますね」「誰が止めたんでしょうか」)
12課	条件のト, ~ナル	(ボタンを押すと, ドアが閉まる。学生だと, 安くなる。)
14課	スル動詞	→ 可能形
15課	スル動詞	→ テミル, テオク
	他動詞	→ テアル
	スル動詞	→ 命令形
16課	スル動詞	→ 意向形
17課	スル堂	→ 受身形
21課	～ヨウニスル/ナル	
22課	使役文	
23課	コトニスル/ナル	スル動詞+ (目的) タメニ/ スル動詞+ (目的) ヨウニ

ず動詞として名付けてある。意志性のある動詞、つまり<+CONTROLLABLE>の動詞を「スル」動詞、意志性の無い動詞、<-CONTROLLABLE>の動詞を「ナル」動詞とした。一方、他動性に関しては、対象格の格助詞「ヲ」（通過点、出発点の「ヲ」は含まない）をとるかどうかを自他動詞を分けるものとした。つまり図1のような動詞の捉え方をこの教科書の基本に据え、学習者の文法理解のための基盤としている。学習者には「スル-VERB」、「ナル-VERB」、「+ヲ-VERB」、「-ヲ-VERB」と呼ばせている。その上で、表1のように課を追ってスル・ナル（意志性）、自・他（他動性）を指導している。

このような導入の結果、課が進むにつれて、学習者はスル、ナルの区別、ヲ格の有無の区別が重要であることに気が付いていき、これと関連する文法事項、例えば目的を示す「ように」「ために」の使い分け（「水があふれないために水を止める」と言えないこと）、理由表現の「～て、」接続（「頭がいたくて、病院に行こう」と言えないこと）などもスムーズに理解することができている。

しかし、理解できることと、使用できることは別問題で、学習者は8課の状態の「～ている」のあたりから混乱を始めるのが常である。例えば「あく、あける」の場合、akの後に-eru、-uのいずれが付くかによって格助詞が異なり、使い方が異なってしまうということが、このような動詞の対立が母語にない学習者にとって非常に困難となる。本稿ではこのような対のある相対自・他動詞の習得過程を特に取り上げて考察を進める。

2.3 初級学習者のクイズ結果から

小林・直井（印刷中）はメキシコの大学でSFJによって学習しているスペイン語話者の相対自・他動詞の習得過程をクイズ結果を通して分析した。同じクイズを学習直後と、その約8か月後に日本語のレベルがかなり進歩した時点で実施した。クイズは1回目7人、2回目5人で人数も少なく、参考程度にしかなれないが、その結果は後退している。つまり、学習直後の成績よりも悪い結果であった。また活用が不正確で問題であることなど、相対自・他動詞が習得されていないことがわかった。出口（1982）はスペイン語は「何かが何かを引き起こす」他動性への指向が根強く、自動詞の豊富な日本語と好対照をなすと指摘している。スペイン語では他動詞で表現できる同じ事象を、日本語では、ある場合は他動的に、またある場合は自動的に表現しなければならない。その使い分けが重要であることはなかなか学習者に認識できにくいようである。

前述のクイズ結果の分析から表2のような5レベルの習得を考えた。

表2 相対自・他動詞の習得レベル

レベル1	語彙を選択する i) 語幹を選ぶ (ex. ak- shim- etc.) ii) 自他を選ぶ (ex. akeru/aku shimeru/shimaru)
レベル2	格助詞を選択する
レベル3	正しい活用形にする
レベル4	意味的に内容に合っている文を作る
レベル5	日本語として適切な表現形を選ぶ

レベル1は、語彙の記憶の問題である。「開く/開ける」「消える/消す」というような対の語彙を覚える場合、どちらが自動詞でどちらが他動詞なのか、記憶の問題である。学習者はi)までは容易に達するがii)に行くときに間違える。レベル2では、選択した語彙にあった格助詞の選択、対象を主語にするのか、目的語にするのかの混乱がある。レベル3では、構文に合った正しい活用ができないという問題である。レベル4では、内容に合っている文かどうかの問題である。語彙と格助詞と活用と完璧であっても、その意味が内容と矛盾する間違いが見られる。これは形式を整えることはできても意味を考えられない場合である。レベル5は先にも述べた適切性の問題である。レベル5を習得するのは非常に難しそうである。

指導上も、上記の各レベルを考慮して、指導していく必要がある。例えば、「電気を消す」という状況を見せて、文を言わせるとしよう。「消す、消える」の語彙(レベル1)、格助詞を入れて「電気を消す/電気が消える」の名詞と動詞の構文形式(レベル2)、「電気を消してください」「電気が消えた」という文に必要な活用形(レベル3)、「電気が消えていますね、誰が消したんでしょうか」のような内容に合わせた構文(レベル4)、そして最後に「電気が消されていますね」のような日本語らしくない文を言わせないような指導(レベル5)が必要となる。上級レベルの学生でも、作文、会話などプロダクションの場面で、このような日本語らしくない不適切な表現が多い。

村木(1991)はヴォイスに関して述べた中で、以下のような文構造の4つのレベルを提示しているが、前述の学習者の習得のレベルと対応するものであろう。学習者にとっては、特に、 δ の通達統語論的なレベルが習得困難なのではないかと考え、次節のような調査をおこなった。

(村木1991より引用)

- α 意味統語論的なレベル (名詞の動詞に対する意味的な役割)
- β 形態統語論的なレベル (名詞の動詞に対する統語的な形式=格形式)
- γ 機能統語論的なレベル (名詞の動詞に対する呼応=一致関係)
- δ 通達統語論的なレベル (言語使用に際しての通達的な側面に関わる問題)

3. 中上級クラスでの調査

中上級レベルの学習者の習得状況を見るためにテストを3種類実施した。

3.1 調査対象

後に取り上げるテスト1, 2, 3のすべてを受けた被験者は、筑波大学の留学生センター、補講コースのレベル3 (約600~700時間以上の学習歴があるとみなしてよいであろう) の学生、95年秋期コース、26人である。これら3つのテストを比較した分析はこの26人のものである。

また、テスト3のみの調査は95年春期コース37人(同、補講コースレベル3)、及び、メキシコのヌエボレオン大学 (SFJ 23課学習者) 5人を対象とした。

従って、母語別の自他選択傾向調査はテスト3の受験総数68人によるものである。テスト3は4問あるが、そのうちの3問は自動詞「アク」でも「アケラレル」でも正しい。そのため日本語母語話者15人を対象に使用傾向を調査した。

3.2 調査方法

3.2.1 テスト1 (単文での自動詞表現)

相対自・他動詞を知っているかどうか、語彙、活用能力の調査を次のようなテストで行った。

<テスト1>

授業を始めた。授業が ()
 お金を集めた。お金が ()
 ひもを切った。ひもが ()
 ……………など

このテストには相対自・他動詞のみでなく、使役動詞、絶対他動詞なども混ざっている。従って答えとしては自動詞、可能形、受け身形などが出てくる。全部で10問とした。

3.2.2 テスト2 (複文での結果表現)

相対自動詞を複文の中で適切に使えるか、特に行為の結果である状態を、自動詞で表現できるかどうか、次のようなテストをおこなった。

<テスト2>

火を消そうとしても、なかなか火は ()
 この棒はいくら曲げようとしても、なかなか ()
 お金を貯めようとしても、なかなか ()
 ……………など

このテストにも使役動詞、絶対他動詞が含まれてある。これも全部で10問とした。

3.2.3 テスト3 (アク、アケラレル、アケルの談話内での使用調査)

これはアク、アケラレル、アケルなどが具体的な談話の場面でどのように選択されるのか調査するのが目的のテストである。以下のような談話を読みながらの3肢選択問題形式となっている。これについては、日本語母語話者15人の傾向も調査した。但し、日本語母語話者に対しては3肢選択ではなく、その部分の自由記述とした。

〈テスト3〉

あなただったら、何と言いますか。一番自然な言い方を選んでください。

1. 部屋に入ろうと思ったのですが、部屋の鍵が見つかりません。鍵をなくしてしまったようです。

「困ったなあ、

- 1) ドアがあかない。
- 2) ドアをあけない。
- 3) ドアがあげられない。」

2. そこで、針金を鍵穴に入れて、開けようとしたのですが、なかなか

- 1) あきません。
- 2) あけません。
- 3) あげられません。

3. それを見た隣の人が「どうしたんですか」と聞きました。それで、答えました。

「実は、鍵をなくしたので、

- 1) ドアがあかないんです。
- 2) ドアをあけないんです。
- 3) ドアがあげられないんです。」

4. 隣の人が「鍵ならありますよ。ここに落ちていました。これですか」と鍵を見せました。

「ええ、そうです。」(ガチャガチャと鍵を鍵穴に入れる)

「ああ、

- 1) あけた。
- 2) あいた。
- 3) あけられた。」

3.3 調査結果と考察

3.3.1 テスト1及びテスト2について

テスト1の結果から被験者の語彙力、テスト2の結果から、自他選択の適切さ、テスト1及び2、の結果から活用の正確さを調べ、それぞれの能力の高さに応じてABCのレベルに分けた。すなわち、同じ一人の受験者が語彙、活用、自他選択の適切さの能力に関してそれぞれAかBかCかの判定をした。語彙力については、明らかに相対する自・他動詞を知っているとみなせれば、活用が

間違っても正しいと数え、活用については、語彙が間違っても活用形が正確ならば正しいとした。自他選択の適切さでは、構文的には受身形や可能形がゆるされるものであっても、日本語らしくない場合は不適切と数えた。テスト1と2の結果からのレベル別グループ分けを以下のようにした。すなわち、Aは80%以上の得点者、Bは80%未満から60%、Cは60%未満と判定した人数である。その結果は表3のようであった。

表3

相対自他動詞の語彙力	: A 15人, B 8人, C 3
活用の正確さ	: A 12人, B 8人, C 6人
自他選択の適切さ	: A 8人, B 7人, C 11人

この数字からは、本調査の被験者の大部分は語彙と活用がかなり習得できているにも関わらず、自他選択の適切さに問題があることが見えてくる。このことを更に詳しく見るために、テスト1、2で見た結果と、テスト3との関係を見ていくが、その前に、テスト3についての調査、表4を見ておこう。

3.3.2 テスト3について

テスト3は談話の中での適切さを見るために考案したものである。先に述べたとおり、68人を対象に実施した。その結果をまとめたのが表4である。「あかない」「あいた」はアク系、「あけられない」「あけられた」はアケラレル系、「あけた」「あけない」はアケル系として、回答の人数をまとめてある。問題の1～3はアク、アケラレル系のいずれも適切な表現である。しかし問題4は日本語母語話者による調査でも100%の人がアク系であった。

この表で注目すべきことは、アケル系を問題1～4を通して日本語母語話者と、日系ポルトガル語話者(日系ブラジル人で祖父母、日系社会を通して耳から日本語を獲得している)が一人も使用していないのに対して、他の言語話者、とりわけ、中国語話者、スペイン語話者が際だって使用していることである。中国語話者にとって、自他の区別が難しいのは、寺村(1982)の指摘にあるように、中国語の動詞は両用動詞が多いためと考えていいだろう。また、文法が似ていると言われる韓国語話者にも、アケル系及びアケラレル系の選択がかなり見られる。このことは鄭(1980)に示されているように、韓国語ではアク、

アケラレル、各々に対応する語がなくいずれもアケラレルのような活用形で表現するという母語の影響と考えられる。

また、日本語母語話者の選択は自動詞のアク系が一番多かったことも注目し値しよう。このテスト問題作成に当たっては、人為の働きを強調することによってアケラレル系も選択可能な問題（問題1～3）と、結果の状態表現でアク系を選択させる問題（問題4）と用意した。すなわち、問題1～3は人為的なトラブルで開けられないのだからアケラレル系を選び問題4は100%の人が「あいた」と言うであろう、という予測をしていた。しかしながら、この調査によると、日本語母語話者は1～4問を通してアク系を一番好んだという結果であった。

このことから、日本語では、行為の結果を表現する場合には、かなり人為が加えられていることがわかっていても、相対自動詞が好まれて使われる傾向があるということが指摘できる。

表4 談話レベルでのアク・アケラレル・アケルの使用傾向母語別調査

(人数)

		日本語話者 (15人)	中国語話者 (25人)	韓国語話者 (20人)	スペイン語話者 (5人)	英語話者 (4人)	(日系)ポルトガル語話者 (3人)	その他 (11人)
問題1	アク	9	2	4	0	2	1	1
	アケラレル	6	17	10	0	0	2	5
	アケル	0	6	6	5	2	0	5
問題2	アク	12	2	5	0	4	1	5
	アケラレル	3	15	9	0	0	2	5
	アケル	0	8	6	5	0	0	1
問題3	アク	8	1	1	1	0	1	1
	アケラレル	7	16	13	0	3	2	9
	アケル	0	8	6	4	1	0	1
問題4	アク	15	4	12	0	2	2	5
	アケラレル	0	2	3	0	0	1	3
	アケル	0	19	5	5	2	0	3

3.3.3 テスト1, 2, 3の相互関係

表3に示した相対自・他動詞の語彙能力レベル(テスト1), 活用の正確さの能力レベル(テスト1, 2), 複文において自・他動詞を適切に選択する能力レベル(テスト2), それぞれA, B, C, レベルと談話内で相対自・他動詞(アク・アケル・アケラレル)を選択する能力(テスト3)にはどのような関係があるのか, 3種のテストをすべて受けた26人について調べ, 図2, 3, 4のようなグラフにまとめた。いずれのグラフも縦軸はテスト3で使用したアク系, アケル系, アケラレル系の使用総数の割合で, 左端は母語話者のものである。

図2は相対自・他動詞の語彙力別(テスト1), 図3は活用の正確さの能力別(テスト1, 2), 図4は複文での自・他動詞を適切に選択する能力別(テスト2)に学習者をグループ分けし, それぞれの使用傾向を示したものである。

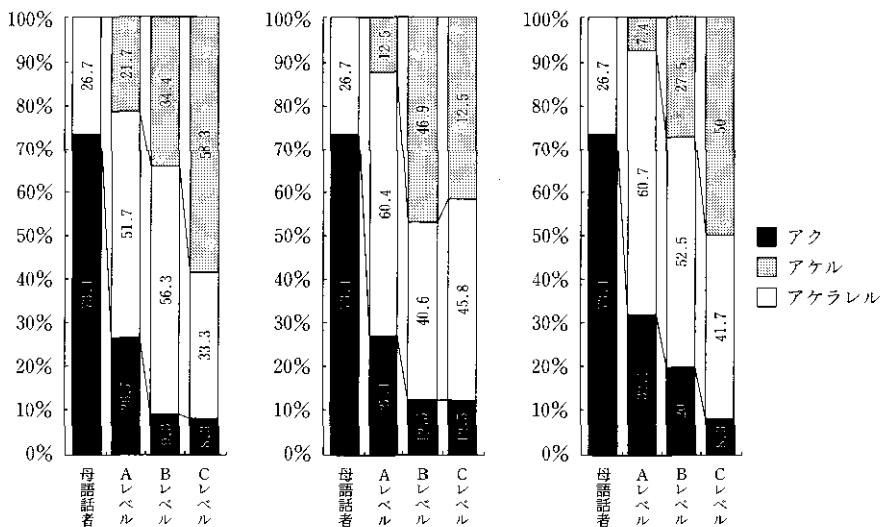


図2 相対自他動詞の語彙能力別

図3 活用の正確さの能力別

図4 複文での自他選択能力別

上記の図から, テスト3のような行為の結果を表わす談話でのアク, アケル等の使用について以下の4点が指摘できる。

- 1) 母語話者の場合、アク系使用傾向が顕著でアケル系が皆無であったのに対して、学習者はいずれのグループにおいてもアク系の使用が少ない。
- 2) Aレベルは、いずれの分け方の場合でもアケラレル系の使用傾向が強い。つまり、自他動詞の語彙知識が高い場合も、動詞の活用が正確にできる能力がある場合も、さらに、複文での自他選択能力が高い場合も、アク系よりもアケラレル系を選択する。
- 3) 動詞の活用能力の低い学生は(図3)アケル系を使用する傾向が顕著である。アケラレル系の使用を避け、代わりにアケル系を使用し、「困ったなあ、ドアを開けない」のような受け入れ難い表現を選択している。
- 4) 誤り表現であるアケル系を選択した人は語彙知識の低い人に(図2)一番多い。

アケラレル系もアケル系からの派生であることを考えれば、アケルと、アクの習得度は極端に差があることが想像できる。調査の対象としたのは、前述した通り、600から700時間以上学習した人々であり、アクを学習していないわけではなく、学習したにも関わらず談話レベルで使用できるほどに習得出来ないしていると推測できる。日本語母語話者の使用傾向の実態との極端なずれを注視したい。

4. 日本語らしいヴォイスの選択は習得可能か

「自動詞+テイル」が結果の状態を表すことを初級の学習者に導入する場合、黒板に図5のような絵を書いて、学習者を分かったような気にさせているのが、日本語教育現場での処理であろう。自然に消えた(1)のような場合だけでなく、(2)のような動作・行為の結果として残る状態も自動詞で表現するのだと指導する。この時点で、受け身形が既習であれば、(2)の場合、キエタ、キエテイルの代わりにケサレタ、ケサレテイルを使ってもいいかと質問が出る。また、ケシテアルとの違いも説明することになる。学習者の母語に対応する自動詞がない場合には彼らは母語の何らかの表現形式、例えば、受身形などに置き換えて理解しようとする。このため、どうしても理解できずに、未消化のままになるようである。行為の結果の状態をどのように認知し、どのように言語化するのかは、各言語によって異なるためである。

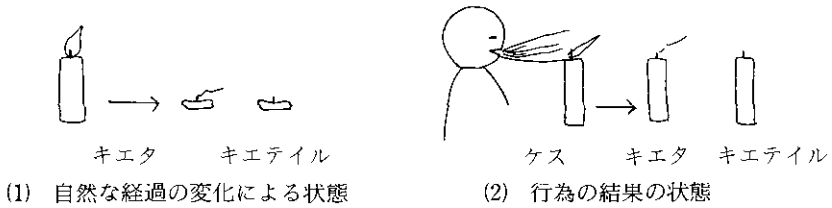


図5

行為者（使役者）が対象（初期状態）に力を加えて変化を生じさせ、ある状態（変化後の状態）になったという（2）の認知構造を、中村（1993）^(註3) にならって示すと、図6のような基本的な絵図となる。

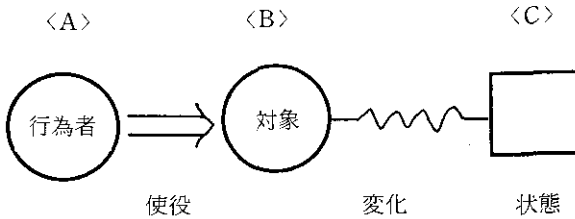


図6

習得困難なポイントはCの状態を表現するのに、ABCのどの部分までを認知のスコープに入れ、どの部分を言語化するのかということ、談話の文脈に合わせて適切に選択できないことにある（ABCは便宜的にこの絵図の部分を示すために付した）。具体的には以下のような難しさがある。

- 1) 動詞語彙それぞれの持つ相が、各言語によって異なる。つまり動詞によって、Bまでの場合と、Cまでの場合とある。（宮島1985）
- 2) Cを表現するのに日本語においても、例えば次のような様々な言語形式がある。以下のABCは認知スコープがどの範囲かを示し、（ ）は認知されているが言語化されないことを示す。

火をけた	ABC	火がけしてある	(A)BC	火がきえた	BC
火がけされた	(A)BC	火をけしておく	ABC	火がきえている	BC

火がけされている(A)BC 火がけせた ABC 火がきえてしまった BC

事態を描き出すための言語化にあたっては、どの段階の相を表現するのか、及び、行為者による行為に視点をおくのか、変化した対象に視点をおいて表現するのか、更に、どのようなムード表現なのか、などを考慮に入れて言語形式を決定するが、学習者にとってはこの決定が困難である。学習者の母語にも様々な言語形式があり、それと日本語の不一致が大きいほど、習得は困難となろう。

単文レベルであっても、上記の難しさがあるが、これが主語の省略される複文の場合は、さらに前件とのからみで複雑な条件が加わって選択しなくてはならない。例えば次のような例文を見てみよう。

- ・古い建物を壊そうと思ってもなかなか | 壊れない (1)
- | 壊せない (2)
- ・古い建物を保存したかったのに、 | 壊れた (3)
- | 壊された (4)

この場合、多くの学習者が一番理解できないのは(1)のような人為が加わっているのにも関わらず、自動詞で表現する場合である。なぜ(1)を「壊されない」と言えないのか、(2)と言えるのに、なぜ(1)の言い方も存在するのか(1)(2)はどう違うのかと疑問を持つ。「壊れない」のような自動詞表現は行為者の責任を明らかにしないと言って文化的な不信感さえ示す場合がある。一方、(3)(4)のような自然に壊れたのか、人為的に壊されたのかの違いは理解し易い。

前述のアク・アケル・アケラレルの調査結果で、アケラレルの選択が多かったが、アケルの場合、可能形と受身形が同じであることから、被験者がどちらのつもりで選択しているかわからない。これが「壊す」のような5段動詞であれば、さらに明確になろう。さらに調査してみる必要がある。

習得の立場から見ると、自動詞による行為の結果の状態表現は、(1)文化的に好まない、母語の表現形式と矛盾する、(2)他の表現でもその事態は表現できる、という2点から、学習動機の低いものになり、ますます習得を困難にしていると考えられる。

5. おわりに

本稿では、外国語として日本語を学習する人にとって相対自動詞によって、行為の結果の状態を表現することが難しいことを、調査テストを分析することによって見てきた。相対する語彙を覚えること、格助詞と一致させること、その活用形を正確に作れること、というような初歩的な学習がほぼ達成されている学習者でも、受け身、使役、可能、使役受け身、自発のようなヴォイス全体の中で自・他動詞を位置づけ、使い分けられるようになるのは困難であることが明らかになった。特に、条件文の様々な接続表現の後続文として、対象が主語になる場合の自動詞表現は習得されにくい。特に、談話レベルで自動詞を運用することは非常に難しいことが分かった。一方、日本語母語話者の自動詞を好む傾向も顕著であった。

学習者が習得できない原因としては次のような点が考えられよう。

1. 文法記述がまだ十分でない。
2. 日本語教師がその記述を生かした指導をしきれていない。
3. 母語干渉が強く、また学習の動機づけも弱い。

1, 2についてはさらに研究を進めなければならない。また、3については学習者の情意的な側面も考慮した習得過程の研究が必要であろう。日本語話者は自動詞によるナル的な表現を好み、学習者が他動詞によるスル的な表現を好むとしたら、互いに相手の表現に不信感や不快感を持ち、相手の文化の評価にまで至る可能性もあり、学習動機も弱くなるのではないだろうか。

注

- 1) 寺村 (1982) は第3章「態」の中で、受動態、可能態、自発態、使役態を扱い最後に自・他動詞を取り上げているが、「日本語の動詞の形態のある部分を、格との相関=態という観点から体系づけようとするならば、それはむしろこの節で見ようとする動詞の自他の対立を本とし、受け身、使役、その他は対立する自他のある形に託されたある意味が次第にいくつかの一般的な類型として把握されるに至ったものだと思えるのが本当であろうと思われる。」と述べている。本稿では、何に視点をおいて表現するのかということに関係してくる構文の問題を大きくヴォイスの問題として考え、自他の問題を取り上げている。
- 2) 早津 (1989) は寺村の相対他動詞、絶対他動詞をそれぞれ有対他動詞、無対他

動詞と呼んで論じている。

- 3) 中村 (1993) は認知意味論の絵図を用いて事態の認知パターンと構文の関係を示す試みをしているが、その絵図は Langacker のものに Croft を援用しているとしている。

参考文献

- 小林典子・直井恵理子 (1996) 「自・他対応動詞の習得は可能か — スペイン語話者の場合 —」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』11号 (印刷中)
- 佐藤琢三 (1994) 「動詞の自他対応と様態指定」『筑波応用言語学研究』1
- 高橋太郎 (1985) 「現代日本語のヴォイスについて」『日本語学』4-4
- 筑波ランゲージグループ (1992) 『Situational Functional Japanese』凡人社
- 寺村秀夫 (1975) 「「表現の比較」ということについて」『日本語と日本語教育—発音・表現編—』文化庁・孤立国語研究所
- (1976) 「「ナル」表現と「スル」表現 — 日英「態」表現の比較」『日本語と日本語教育 — 文字・表現編—』国立国語研究所
- (1977) 「態の表現と「適切さ」の条件」『日本語教育』33
- (1982) 『日本語のシンタックスと意味1』くろしお出版
- 出口厚実 (1982) 「スペイン語 — 再帰形式をめぐる —」『講座 日本語学10 外国語との対象 1』明治書院
- 中村芳久 (1993) 「構文の認知構造ネットワーク」『言語学からの眺望』福岡言語学研究会編 九州大学出版会
- 西尾寅弥 (1982) 「自動詞と他動詞 — 対応するものとししないもの —」『日本語教育』47
- 早津恵美子 (1989) 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて」『言語研究』95
- 宮島達夫 (1985) 「「ドアをあけたが、あかなかった」— 動詞の意味における〈結果性〉 —」『計量国語学』14-8
- 村木新次郎 (1991) 「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」『日本語のヴォイスと他動性』(仁田義雄編) くろしお出版
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房
- 鄭 秀賢 (1980) 「日本語・韓国語の受け身表現の対象研究 — 相との関係において —」(日本語教育学会例会発表1980, 2, 23 要旨)